

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 8 日現在

機関番号：27601

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22730400

研究課題名（和文） 戦後ジャーナリズムの思想とスタイルに関する研究

研究課題名（英文） A Study of the Thought and Style of Journalism of Postwar Japan

研究代表者

阪本 博志（SAKAMOTO HIROSHI）

宮崎公立大学・人文学部・国際文化学科・准教授

研究者番号：10438319

研究成果の概要（和文）：本研究の主な成果は、これまで誤った通説が信じられてきたがゆえに研究が空白であった占領期の犬宅壯一の活動を明らかにし、そこに彼が活動を始めた戦間期における特色と彼が最盛期を迎えた昭和 30 年代にあたる期間との連続性／非連続性を考察したことである。このようにして、1955 年以降の最盛期の犬宅の思想とスタイルが醸成された時期にあたる占領期の犬宅の活動を検討した。そのうえで 1955 年以降の犬宅を近現代メディア史に位置づけることを試みた。

研究成果の概要（英文）：Soichi Oya's activities during the Allied occupation period of Japan have never been researched so far, because a common view which is wrong has been accepted. So I have found the truth of his activities of this period. And I have examined these activities which made the idea and style of his golden age beginning in 1955. In this process, I consider the relationships between this age and the period when he started his activities—the time between The World War I and II—. I have tried to position him in the history of the media of modern Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：犬宅壯一 猿取哲 占領期 1950 年代 歴史社会学 ライフヒストリー メディア史 雑誌ジャーナリズム

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、1950年代を代表する大衆娯楽雑誌『平凡』の研究に関する初のまとまった著作である『『平凡』の時代——1950年代の大衆娯楽雑誌と若者たち』（昭和堂）を2008年に上梓した。

この研究を続ける中で、メディア史的観点から、大宅壮一に着眼するに至った。『平凡』はテレビが本格的に普及する直前のラジオ・映画が主要なマスメディアであった1950年代に、この両メディアと結びつくことによって大衆の支持を集めたメディアである。一方1950年代半ばから1960年代半ば、週刊誌・新書に代表される「中間文化」（加藤秀俊）の興隆や民間ラジオ放送の開始・テレビの普及を背景に評論家として最盛期を迎えたのが大宅である。大宅は、新聞・雑誌・ラジオ・テレビを舞台として活躍する「マスコミ四冠王」と言われ、「マスコミの帝王」の呼び名をほしいままにした。これらから、『平凡』と大宅にメディア史的連続性を見出すことができる。

翻って大宅に関する学術的研究の蓄積を見たとき、「マスコミの帝王」とまで言われた大物にしては、学術的蓄積が意外に乏しかった。

大宅に関する文献として紹介されることが多いのは、大隈秀夫・青地晨といった彼の弟子による評伝である。これらは大宅を知るのには便利であるが、学術的な分析がなされたものではない。

一方、先行研究においては、大宅存命中の1959年に発表された鶴見俊輔「後期新人会員——林房雄・大宅壮一」（思想の科学研究会編『共同研究 転向』上巻、平凡社）のほかは、特定の時期に焦点を当てたものが見られる。

以上から研究代表者は、大宅のライフヒストリーをトータルに捉えた初の論文「大宅壮一研究序説——戦間期と昭和30年代との連続性／非連続性——を、『文学』2008年3・4月号に発表した。

2. 研究の目的

本研究は、評論家・大宅壮一のライフヒストリーに焦点を当て、戦後日本におけるジャーナリズムの思想とスタイルに歴史社会学

的考察を加えるものである。「ジャーナリズム」の中でも特に、彼が活躍した雑誌ジャーナリズムを中心に扱う。そして「マスコミの帝王」と言われた大宅の思想とその活動のスタイルを把握し、戦後日本社会に位置づける。

3. 研究の方法

大宅没後に全集が編まれてはいるものの、未収録の著作も多い上に編集委員が他界している。また『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録 人名編』の「大宅壮一」の項に含まれていない大宅の手による雑誌記事の量は膨大である。これらから、雑誌等に発表した著作を収集し、大宅の活動の全体像を、占領期から1950年代を中心に、明らかにする作業を進めた。そしてその思想とスタイルに考察を加えた。

4. 研究成果

敗戦から1940年代後半にかけての大宅壮一についての丹念な文献調査をおこなった結果、従来信じられてきた通説に大きな誤りがあることを発見した。

この知見について、2010年度に、早稲田大学20世紀メディア研究所主催のシンポジウムで報告した。そして上記の通説を修正し占領期の大宅の活動に考察を加えた論文を、同研究所発行の学術雑誌において発表した。

2011年度には、大宅がジャーナリズムに本格的に復帰する1950年前後の活動の一端について、日本出版学会で報告した。そして、その知見等をまとめ大宅の思想とスタイルを検討した拙論を発表した。

ジャーナリズムに復帰した大宅は、1955年頃から「マスコミの帝王」と呼ばれるに至る。この1950年代の大宅の活動において重要なことは、国民的雑誌とされる『文藝春秋』と1954年に発行部数が百万部を超える『週刊朝日』に、多くの期間連載を持っていたことである。『週刊朝日』における1950年代の連載に考察を加え、「マスコミの帝王」としての大宅を戦後社会に位置づけた論考を執筆した。これは、2012年刊行予定の単行本に収録される。

また、大宅のライフヒストリーに歴史社会学の考察を加えた論考が、2012年刊行予定の単行本に収録される。

これらとともに、1950年代における大宅の活動を雑誌ジャーナリズム全般に位置づける基盤をも整地した。具体的には、『世界』『平凡』といった当時の主要な雑誌の位置関係について考察した論考を雑誌に寄稿した。また、雑誌ジャーナリズムにおける大宅の特質の一端を明らかにするべく、大宅のレトリックについても検討し、2010年度に国際日本文化研究センターにおいて口頭発表を行った。

以上のほか、大宅の活動についてわかりやすくまとめた文章を世界思想社のPR誌に寄稿した。占領期の大宅に関する研究については2011年に、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター発行の『大衆文化』第6号において紹介した。

また、MRT 宮崎放送ラジオで2012年1月15日に放送された「サンデーラジオ大学」に出演し、占領期から1950年代にかけての期間を中心に大宅の活動について、一般市民に伝えた。

なお、本研究で得た知見をもとに関連書籍の書評を『週刊読書人』に2度執筆した。このジャーナリズム研究をいかし、『宮崎日日新聞』の「紙面診断」欄にこの2年間で6回寄稿した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

①阪本博志「大宅壮一の「再登場」——1950年刊行の『日本の遺書』『人間裸像』に着眼して——」単著、『出版研究』第42号、87-103頁、2012年3月、査読有

②阪本博志「占領期の大宅壮一——「大宅壮一」と「猿取哲」——」単著、『Intelligence』第11号、早稲田大学20世紀メディア研究所、106-119頁、2011年3月、査読有

〔学会発表〕(計3件)

①阪本博志「大宅壮一の記録文学——『日本の遺書』の成立と意義を中心に——」単著、日本出版学会(於明治学院大学)、2011年5月14日

②阪本博志「大宅壮一と猿談」単著、国際日本文化研究センター井上班共同研究会(於国際日本文化研究センター)、2010年7月4日

③阪本博志「占領期の大宅壮一——「大宅壮一」と「猿取哲」／戦前の活動から「無思想人」宣言へ——」単著、早稲田大学20世紀メディア研究所「第54回特別研究会 占領期雑誌資料大系文学篇刊行記念シンポジウム」(於早稲田大学)、2010年4月2日

〔図書〕(計4件)

①阪本博志「大宅壮一」単著、土屋礼子・井川充雄編『近代日本メディア人物誌——ジャーナリスト編』ミネルヴァ書房、2012年12月刊行予定

②阪本博志「1950年代『週刊朝日』と大宅壮一——連載「群像断裁」をめぐって——」単著、吉田則昭・岡田章子編『雑誌文化の戦後史』森話社、2012年8月刊行予定

③阪本博志「1950年代大衆文化と国際交流——雑誌『平凡』と西村和義のライフヒストリー——」単著、宮崎公立大学地域貢献部会編『宮崎公立大学定期公開講座16 国際社会と私たちの暮らしを考える』鉦脈社、105-125頁、2011年8月

④阪本博志「出版社の参入と退出」単著、日本出版学会編『白書出版産業2010——データとチャートで読む出版の現在』文化通信社、全231頁、2010年9月
担当部分：18、19頁

〔その他〕

新聞・雑誌等への寄稿(全12件)

①阪本博志「紙面診断 宮日を読んで 絆づくりの担い手に」単著、『宮崎日日新聞』2012年2月5日朝刊2面

②阪本博志「紙面診断 宮日を読んで 鉢呂氏報道検証欠く」単著、『宮崎日日新聞』2011年10月2日朝刊2面

③阪本博志「占領期の大宅壮一をめぐる「点

と線」単著、『大衆文化』第6号、立教大学
江戸川乱歩記念大衆文化研究センター、
36-42頁、2011年9月

④阪本博志「大宅壮一の記録文学——『日本の遺書』の成立と意義を中心に」単著、『日本出版学会会報』第130号、29-30頁、2011年7月

⑤阪本博志「紙面診断 宮日を読んで 「絆」見えた震災報道」単著、『宮崎日日新聞』2011年6月5日朝刊2面

⑥阪本博志「紙面診断 宮日を読んで 「県民の絆」結ぶ役割」単著、『宮崎日日新聞』2011年2月6日朝刊2面

⑦阪本博志「「平凡友の会」と六〇年安保——電子出版元年・安保闘争50周年の年に『平凡』と『世界』を通して考えること——」単著、『d/SIGN』第18号、太田出版、172-175頁、2010年10月

⑧阪本博志「紙面診断 宮日を読んで 「地域の誇り」再認識」単著、『宮崎日日新聞』2010年10月3日朝刊2面

⑨阪本博志「書評 塩澤幸登著『「平凡」物語——めざせ！百万部 岩堀喜之助と雑誌『平凡』と清水達夫』」単著、『週刊読書人』2010年8月20日号6面

⑩阪本博志「紙面診断 宮日を読んで 紙面通じ絆芽生える」単著、『宮崎日日新聞』2010年6月6日朝刊2面

⑪阪本博志「大宅壮一における多様性について」単著、『世界思想』第37号、世界思想社、31-34頁、2010年4月

⑫阪本博志「書評 吉川登編『近代大阪の出版』」単著、『週刊読書人』2010年4月9日号6面

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阪本 博志 (SAKAMOTO HIROSHI)
宮崎公立大学・人文学部・准教授
研究者番号：10438319